

那賀川流域住民ヒアリング調査結果  
(中間報告)

平成２８年 ８月２３日

## 1. ヒアリング調査

### (1) ヒアリング調査の目的

ヒアリング調査は、過去的那賀川及び坂野・今津・那賀川河口・富岡港海岸の情報が、既存の文献・資料に残っている情報からでは詳しいことがわからないところもあり、当時の状況を知る地域住民の方々に聞き取り調査を実施した。

聞き取り調査是那賀川の昭和 30 年以前から現在までの河床材料、河原の状況・流況、河川の利用状況、生息魚類等の分布、今後の望ましい姿等について、坂野・今津・那賀川河口・富岡港海岸の昭和 30 年代以前から現在までの海岸の状況・利用、生息魚類等の分布、干潟の変化、今後の望ましい姿等について実施した。

### (2) ヒアリング実施・結果

ヒアリング調査は、那賀町及び阿南市より昭和 30 年代以前から、現在までの那賀川や周辺海岸の変遷についてご存じである方を紹介して頂き、表 1 に示すとおり、那賀川の土砂生産域・ダム域、河道域及び海岸域について 23 名の方について 6 月下旬～7 月上旬にかけ実施した。

これらヒアリング結果について図 1～図 4 に整理した。

表 1 ヒアリング実施状況

No.	領域	地区		地先	年齢
1	河道域	阿南市	上中・柳島・横見地域	横見	80
2				柳島	76
3			羽ノ浦地区(古毛、岩脇、古庄)	岩脇	74
4			大野地区	下大野	67
5				下大野	71
6			加茂谷井区	楠根	78
7				吉井	84
8				深瀬	59
9				加茂	87
10			水井地区	大井	72
11	土砂生産域・ダム域	那賀町	鷺敷地区	和食	94
12			相生地区	朝生	74
13			朴野	84	
14			上那賀地区	桜谷	90
15			木頭地区	助	82
16				出原	70
17			木沢地区	追立	87
18				坂洲	83
19				坂洲	80
20	海岸域	阿南市	今津海岸関係	色ヶ島	64
21				色ヶ島	76
22			坂野海岸関係	和田島	49
23				和田島	65



## 那賀川流域住民ヒアリングとりまとめ

【土砂生産域・ダム域】

## 木頭地区

【主な意見】(No.15,16)

- 出原周辺及び助大橋周辺では、河床は昭和 30 年代より 7～8m 程度上昇した。
- 昭和 30 年代までは助大橋上流は粗い石、下流は細かい石が多かった。
- 昭和 30 年代までは深い淵と急流の瀬が交互に存在していたが、昭和 50 年代には淵は埋まってしまった。
- 昭和 30 年代はアユ、ウナギ、アメゴ、ウグイを採った。現在は、アユ、アメゴは小さく、少ない。
- アユ・アメゴが那賀川の代表的な魚である。
- 木頭では S51 年に災害を経験。これ以降、土砂堆積が進んだ。現在も治山対策が追いついていない。
- 那賀川の望ましい姿は、河床を下げ、自然の流れを回復させること。
- 小見野々ダムの下流も土砂還元が必要と感じる。

【主な意見】(No.15,16)

■出原周辺及び助大橋周辺では、河床は昭和 30 年代より 7~8m 程度上昇した。

■昭和 30 年代までは助大橋上流は粗い石、下流は細かい石が多かった。

■昭和 30 年代までは深い淵と急流の瀬が交互に存在していたが、昭和 50 年代には淵は埋まってしまった。

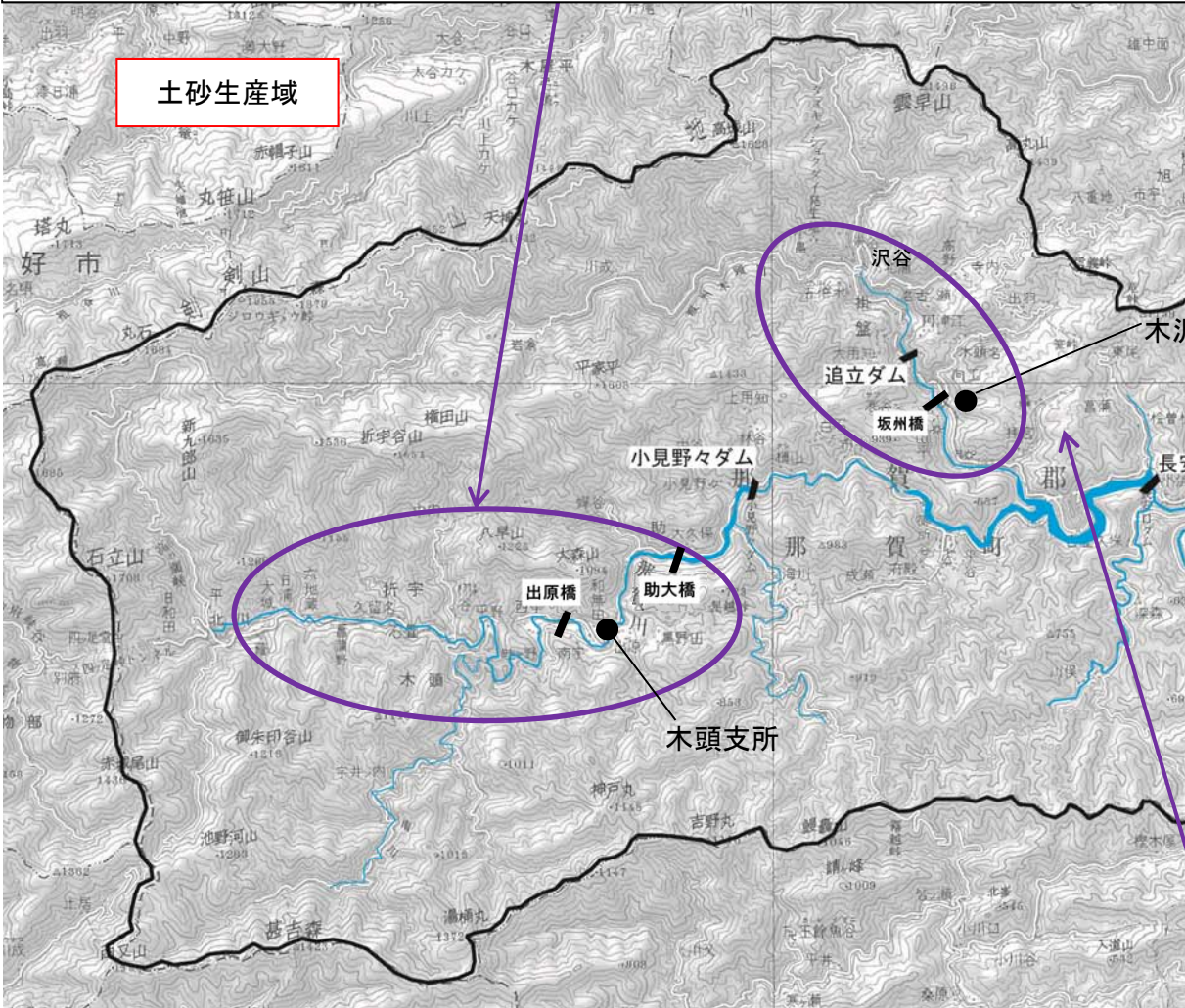
■昭和 30 年代はアユ、ウナギ、アメゴ、ウグイを採った。現在は、アユ、アメゴは小さく、少ない。

■アユ・アメゴが那賀川の代表的な魚である。

■木頭では S51 年に災害を経験。これ以降、土砂堆積が進んだ。現在も治山対策が追いついていない。

■那賀川の望ましい姿は、河床を下げ、自然の流れを回復させること。

■小見野々ダムの下流も土砂還元が必要と感じる。



【出典】国土交通省国土地理院数值地図



## 木沢地区

【主な意見】(No.17,18,19)

- 昭和 30 年代まで、木沢支所付近の坂州木頭川は、人頭大～拳大の玉石、礫が混在していた。坂州橋付近は大きな岩も存在していたが、筏を流すためにすべて壊した。
- 昭和 30 年代までは木沢支所付近は流れが急な瀬、深い淵が混在していた。現在は河床が上昇し、流れは平坦な感じになってしまった。河床は 2m 程度上昇している。
- 木沢地区ではアユ、ウナギ、アメゴ、ウグイ、ギギ、オイカワ、カワムツ、アブラハヤ、ヨシノボリ、クチボソ等の魚類が生息。ダム建設前は天然アユが沢谷まで遡上していた。現在は、アユ、アマゴは少なくなり、小さくなった。
- 追立ダム、長安ロダムの堆砂掘削により、坂州橋付近では、ダム建設以前の河床の一部、淵が回復している箇所もある。
- 現在は、薪炭林を使わなくなったこと、鹿害、スーパー林道の掘削土砂放棄等で山が荒れ、治山が追いついていないため、土砂流出が多い。
- 坂州木頭川の望ましい姿は、現在より河床が低下し、大きな石や岩が露出し、出水で大きな石が動くような自然の川。
- 長安ロダムの土砂管理は必要。下流に迷惑がかからなければ堆砂掘削、土砂還元は期待する。

【主な意見】(No.17,18,19)

■昭和 30 年代まで、木沢支所付近の坂州木頭川は、人頭大～拳大の玉石、礫が混在していた。坂州橋付近は大きな岩も存在していたが、筏を流すためにすべて壊した。

■昭和 30 年代までは木沢支所付近は流れが急な瀬、深い淵が混在していた。現在は河床が上昇し、流れは平坦な感じになってしまった。河床は 2m 程度上昇している。

■木沢地区ではアユ、ウナギ、アメゴ、ウグイ、ギギ、オイカワ、カワムツ、アブラハヤ、ヨシノボリ、クチボソ等の魚類が生息。ダム建設前は天然アユが沢谷まで遡上していた。現在は、アユ、アマゴは少なくなり、小さくなった。

■追立ダム、長安ロダムの堆砂掘削により、坂州橋付近では、ダム建設以前の河床の一部、淵が回復している箇所もある。

■現在は、薪炭林を使わなくなったこと、鹿害、スーパー林道の掘削土砂放棄等で山が荒れ、治山が追いついていないため、土砂流出が多い。

■坂州木頭川の望ましい姿は、現在より河床が低下し、大きな石や岩が露出し、出水で大きな石が動くような自然の川。

■長安口ダムの土砂管理は必要。下流に迷惑がかかれば堆砂掘削、土砂還元は期待する。

図1 ヒアリング結果概要（土砂生産域・ダム域）



【河道域（県管理区間）】

朝生・築ノ上・吉野・川口・朴野（朝生～川口ダム湛水区間）

【主な意見】(No.12,13)

- 昭和 30 年代までは、朝生では玉石に 2～3cm の玉砂利が混在し、河原で野球ができた。
- 昭和 30 年代までは朝生～築橋付近の河岸は砂が堆積し、竹藪があった。築橋付近は急流の瀬、淵が存在した。取水施設を見ると、現在まで、河床は 1.5m 以上低下し、露岩部も増えた。
- 川口ダムができる前は、現在の川口ダム付近は 30～40cm の玉石があった。
- 昭和 30 年代までは、アユ、ウグイ、アユカケ、ニゴイ、ウナギ等の魚類が見られた。現在は、アユ、アメゴを放流している。
- 昭和 40 年頃、砂利は砂利採取で根こそぎ採取され、現在は玉石のみ残った。現在、これだけ砂利の無い川も珍しい。玉石や砂利が無ければ、藻類が付かないのでアユの餌も無い。
- 那賀川の望ましい姿は、玉石と玉砂利が川底に混在する川。
- 上流から土砂が流れてこないと川はやせる。砂利も魚も採りすぎたことが問題であり、土砂還元は期待できる。

【出典】国土交通省国土地理院数値地図



桜谷（川口ダム湛水区間～長安ロダム）

【主な意見】(No.14)

- 昭和 30 年代までは、小計橋付近は砂がたまっていた。小砂利、人頭大の石があった。また、瀬淵も存在し、水量も多く、流れがあった。
- 昭和 30 年代までは桜谷発電所の堰堤下流は、‘川堀さん’がおり、淵になっていた。水は綺麗で、泳いだり飛び込んだりした。小計橋下流の立岩は筏下りの難所、また、亀淵という淵もあった。
- 昭和 30 年代までは、立岩周辺はアユの名所で、子供でも採っていた。アユの他に魚類は、オイカワ、ウナギ、アメゴ、ウグイ、ギギ、ヨシノボリがいた。
- 長安ロダムができて砂は無くなった。また、アユは減った。現在は、アユは放流しているが泥臭い。
- 那賀川の望ましい姿は、水量が多く、きれいな川。
- 土砂還元は、川がきれいになるので続けてよい。

水井町・大井町・和食郷（十八女大橋～丹生谷橋）

【主な意見】(No.10,11)

- 昭和 30 年代、水井では 10cm 以上の大きな玉石が多く、歩きづらい河原だった。玉石に砂利が混じっていた。
- 昭和 30 年代、田野橋から上流も広い礫河原が続いていた。下流は砂も堆積していた。田野橋下流の湾曲部の内側は、砂が堆積し‘砂崎’と呼ばれていた。
- 昭和 30 年代は白波が立つ瀬も多く、現在は、瀬・淵がなくなりトロのような平坦な流れになった。
- 昭和 30 年代までは、アユ、オイカワ、ウグイ、オイカワ、アユカケ、ウナギ、ヨシノボリ、クチボソ、フナ、ニゴイ、カワエビ等の魚介類が見られた。現在は、カワエビ、コイ、フナが減り、ニゴイが増えた。
- 現在、細野橋付近から下流は露岩しているが、昭和 50 年代頃までは砂利が堆積していた。
- 河床に存在する上水施設を見ると、昭和 50 年代に比べ、河床は 1.5m 以上低下し、一部では露岩が見られるようになった。
- 那賀川の望ましい姿は、川で遊べるようになって欲しい。50cm を超える大きな石はいらないが、それ以下の玉石がたくさん存在し、広い河原がある川。
- 浸水地区もあり賛否両論あるが、元の河床に戻るような土砂還元は期待する。

図 2 ヒアリング結果概要（河道域・県管理区間）



## 那賀川流域住民ヒアリングとりまとめ

【河道域（国土交通省管理区間）】

上中町・柳島町・横見町地区（JR 那賀鉄道橋～那賀川橋）

【主な意見】(No.1,2)

■S36 第 2 室戸台風、S40 年集中豪雨、H26 年台風 11 号では堤防天端付近まで水位が上昇した。

■昭和 30 年代以降の砂利採取により河床は低下。現在、回復しているが、砂利採取以前より低い。

■昭和 30 年代はアユ、オイカワ、ウナギ、フナ、ハゼ類、テナガエビ等の魚介類を採った。

■近年、那賀川橋下流は局所洗掘により水面は狭まり、水深は深くなった。

■那賀川の望ましい姿は、川を利用できる施設整備をし、川に人が来て、愛着が持てる川。

■洪水に対する不安は常にある。流下能力の確保、堤防強化等の治水対策を整備する条件のもとできるのであれば、土砂還元により土砂を自然の流れに戻すことは必要である。

吉井町・楠根町・深瀬町・加茂町（北岸堰～十八女大橋）

【主な意見】(No.6,7,8,9)

■昭和 30 年代まで、加茂～楠根付近は砂利～人頭大の石があった。砂地の中州が存在し、昭和 40 年代まで畑地として芋を栽培していた。昭和 35～40 年頃から、ダムの築造もあるが、築堤もされ、川が変わりだした。

■昭和 30 年代まで、深瀬～吉井付近は浅瀬や淵の分布が明確であった。自然堤防は砂で、竹藪であった。

■昭和 30 年代まではアユ、ウナギ、オイカワ、フナ、ナマズ、ギギ、ニゴイ、カワエ、カニがいた。

■昭和 40 年頃には深瀬～楠根では、砂利採取により砂利は一気に減少したが、現在は、砂利が堆積し河床は全体的に上昇した。深瀬では最大 4 m 程度上昇。

■現在の石は小さく、アユの餌が付かないため、アユが育たない。大きな石も必要。

■加茂地区等の河床上昇している箇所継続的な砂利の除去、堤防の補強が必要。

■那賀川の望ましい姿は人々が河原、水際で遊べるようになり、身近に感じられる川。

■土砂還元は和食などの中流域に土砂が堆積できるよう、土砂の流し方を工夫して欲しい。長安口ダムの有効活用のためにも治水に配慮した上で実施する。



下大野町・上大野町・羽ノ浦町岩脇（那賀川橋～北岸堰）

【主な意見】(No.3,4,5)

■昭和 30 年代までは那賀川橋付近は材木の集積場であった。河原は材木が多く、トロッコで陸揚げしていた。

■昭和 30 年代、那賀川橋上流は中州が存在し、網状であった。現在は、局所洗掘により水面は狭まり、水深は深くなった。

■昭和 30 年代は拳大くらいの石からなる真っ白な礫河原であった。北岸堰下流右岸側は砂が堆積。砂利採取により根こそぎ砂利を採取した。

■昭和 30 年代はアユ、オイカワ、アユカケ、ナマズ、ウナギを採った。

■昭和 50 年代の砂利採取終了後は、河道は安定してきた。

■S50、S51 年の出水後、多くの土砂流出によりシルト質が堆積し、攪乱の減少とともに那賀川橋上流は樹林化していった。

■那賀川の望ましい姿は、子供の頃（昭和 30 年代）のきれいな礫河原を持つ川。

■砂利採取等で採った分は川に還元すべき。土砂還元により、土砂を自然の流れに戻すことは必要である。



【出典】国土交通省国土地理院数值地図

図3 ヒアリング結果概要（河道域・国土交通省管理区間）



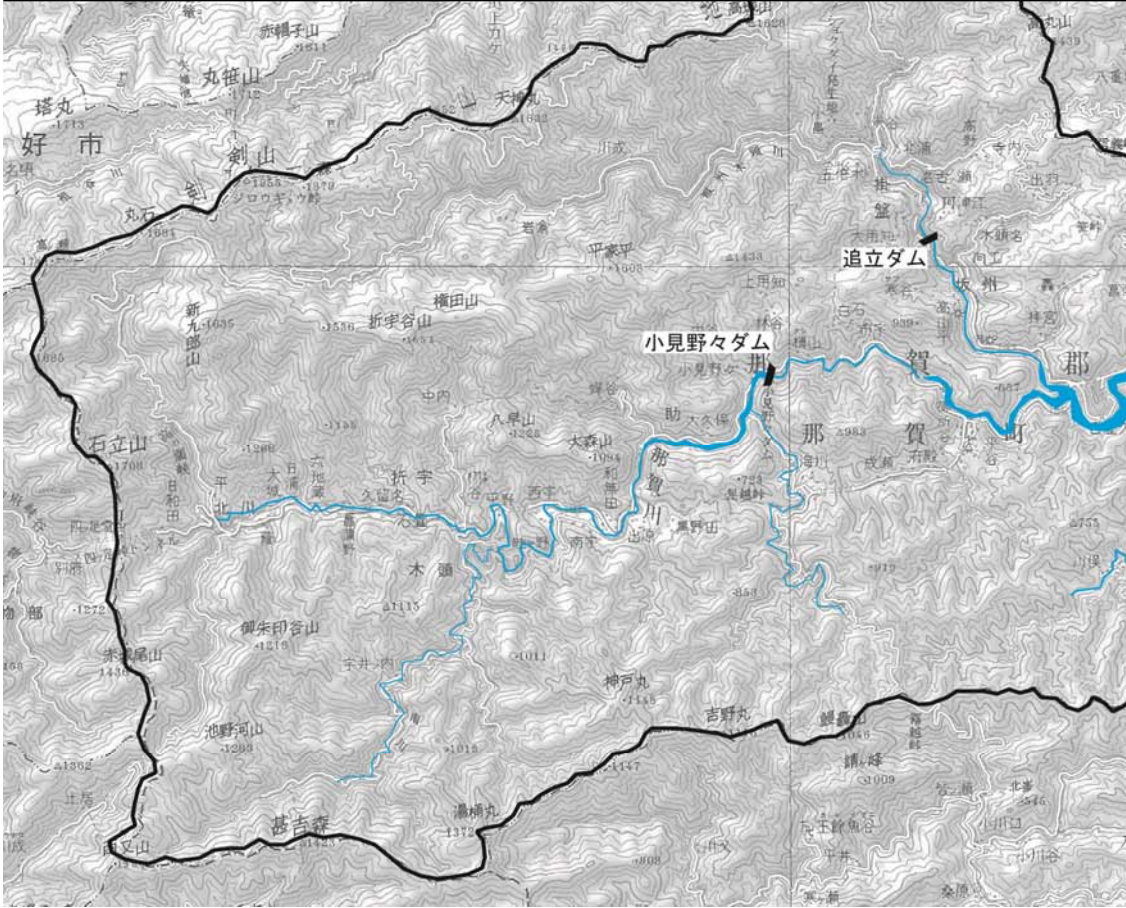
# 那賀川流域住民ヒアリングとりまとめ

## 【海岸域】

坂野海岸

【主な意見】(No.22,23)

- 昭和 30 年代以前は那賀川の河口は北側に向き、砂が供給されていた。
- 和田島周辺は、昭和 30 年代までは砂浜は汀線まで最大 150m程度あった。自然堤防の高さが 1.5m程度あった。
- 昭和 30 年代は、砂底に生息するカレイ、キス、アサリ、バカガイ等が豊富に獲れた。
- S24 ジェーン台風、S36 年第 2 室戸台風でも被害は無かった。
- 和田島では、昭和 54 年までは海水浴ができる海岸で、遠浅であった。
- 近年、約 10 年は平均潮位も上昇傾向にあり、砂が戻ってこない。海岸堤防とともに前浜は必要。
- 現在は、砂浜の侵食により、海岸堤防が転倒しないか不安である。堤防補強と侵食対策が必要。
- 現在、小松島側（北側）の海底はヘドロも堆積してきており、水面下でも変化が起きている。
- 坂野海岸の望ましい姿は、前浜が存在し、堤防の裏には松林が存在する景観。
- ダムの土砂還元は、海岸侵食の対策になるため期待できる。但し、河道での土砂堆積による治水対策を実施した上で土砂還元して欲しい。



今津・那賀川左岸海岸

【主な意見】(No.20,21)

- 昭和 30 年代、那賀川左岸海岸では砂浜は汀線まで最大 50m以上あり、遠浅であった。中島港付近は砂山となっていた。沖には、砂のマウンドがあり、松原があった。
- 昭和 30 年代後半までは、砂浜では海水浴、潮干狩りを行った。ウミガメも産卵のため上陸した。また、砂底に生息するアブラメ、ガガメ、カレイ、キス、アサリ、バカガイ、タコ、イセエビ等が豊富に獲れた。
- 今津・那賀川左岸海岸では、S40 年代に海岸堤防ができると、砂浜が急減に衰退した。波返しによる砂の流出が著しい。
- S40 年代の築堤、那賀川の砂利採取により土砂供給が減少し、海岸が衰退した。
- S40 年代は那賀川左岸海岸沖での砂の盗掘もあり、離岸堤も転倒した。
- 昭和 50 年頃までは台風後、那賀川流出した材木が中島港に多く流達した。那賀川からの流れがあった。
- 現在、今津・那賀川左岸海岸の堤防には痛みが見られ、補強が必要。
- 今津・那賀川左岸海岸の望ましい姿は、堤防に砂の前浜が存在する海岸。
- 治水対策ができれば、ダムの土砂還元は海岸侵食の対策として期待できる。

【出典】国土交通省国土地理院数値地図

図 4 ヒアリング結果概要（海岸域）